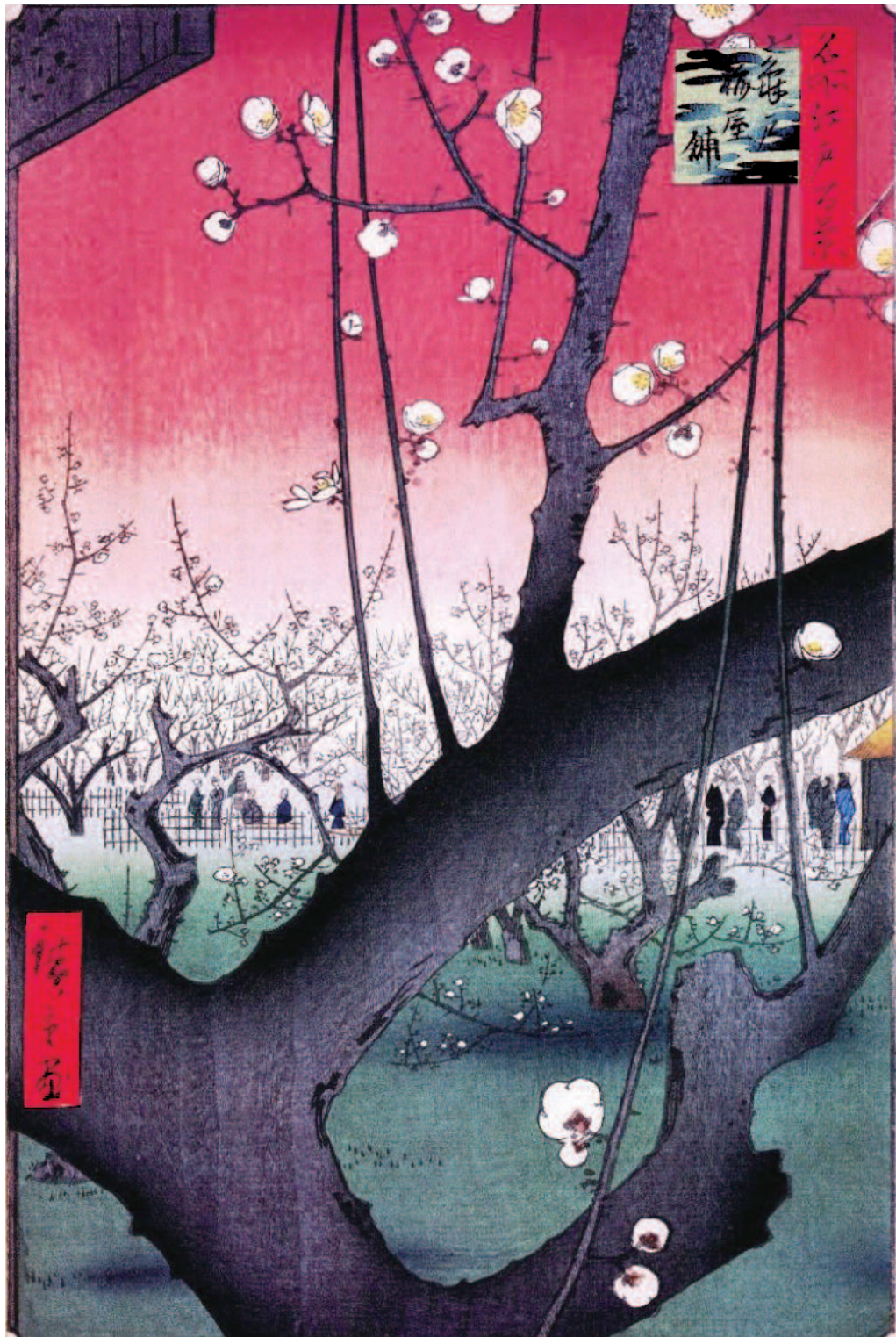


浮世絵
かめいどうめやしき
亀戸梅屋舗

VS

写真
なただらけいだい
那谷寺境内



▲歌川広重「名所江戸百景」の内「亀戸梅屋舗」



この浮世絵は「大はしあたけの夕立」とともに、ゴッホによって模写されたことで名高い。両作とも現在では写真でよく見られる構図だが、当時としてはとても斬新な作風であった。カメラの無い時代に、そのような眼力が備わっていた広重に驚愕する。

梅屋敷は現在の江東区亀戸三丁目辺りにあった。明治43年の水害で全ての梅が枯れてしまい、現在石標柱があるのみ。屋敷の中でも有名だった「臥龍梅」の幹を前景にクローズアップで表現し、遠景に梅を見ながら散策する人々、茶屋で腰掛けて休む人々が描かれている。クローズアップで描かれた梅花の繊細さにも驚かされる。

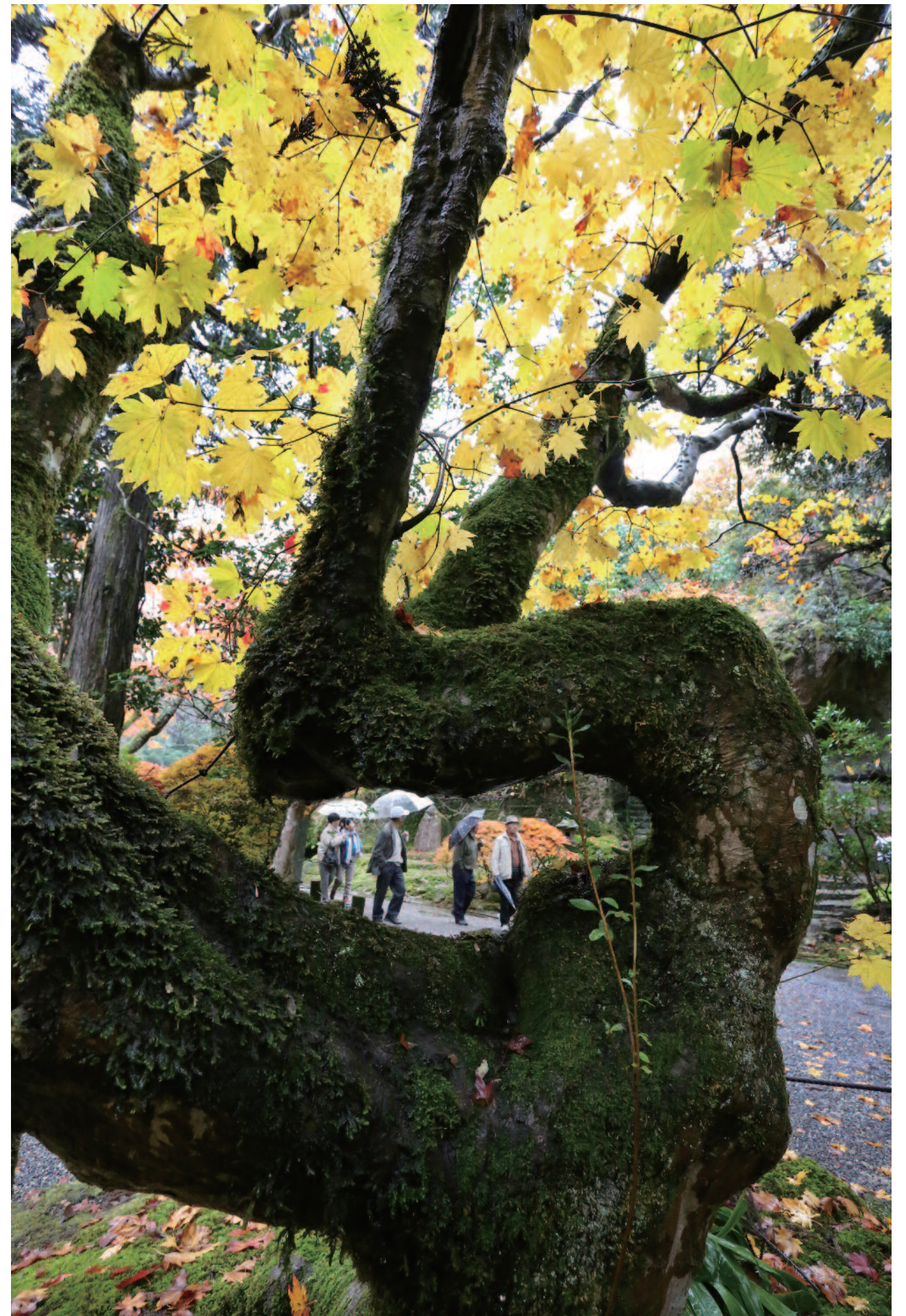
対するは石川県小松市にある「那谷寺境内」である。那谷寺は、真言宗の別格本山で、白山を開山した泰澄大師が開山した千三百年の歴史を誇る寺院である。松尾芭蕉が「奥の細道」で「石山の石より白し秋の風」と詠んだのはこの那谷寺の境内。奇岩に池を配した広大な庭園が有名で、特に紅葉の美しさは別格のものがある。

広重の描いた梅のような雰囲気の良い幹は、どこにでもありそうで実はなかなかない。その理由は、若い樹木ではこのような雰囲気のような幹はなく、やはり古木でなければならないからだ。何年も探していて、何度も訪れていた那谷寺でついに発見した。苔むした古木の幹に囲まれた小さな空間に、散策する人が訪れた一瞬を切取った。



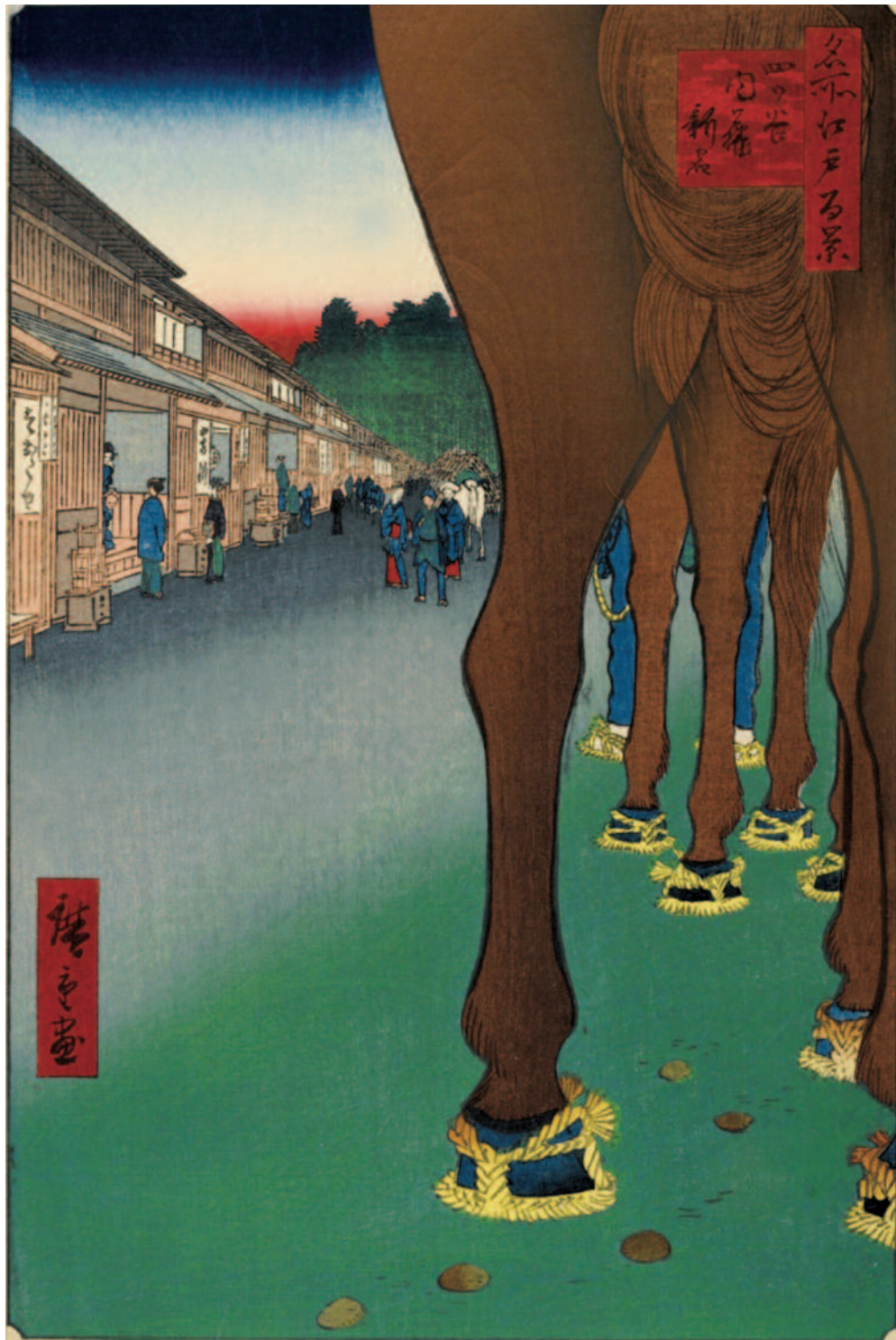
■浮世絵の風景が北陸・小松にある■

那谷寺 ● 石川県小松市



▲那谷寺境内。樹種はハウチワカエデという、巨大な葉を持つ楓。

浮世絵 写真
よ や ないとうしんじゆく かなやたかおか どうき さと
四ッ谷内藤新宿 VS 金屋高岡銅器の里



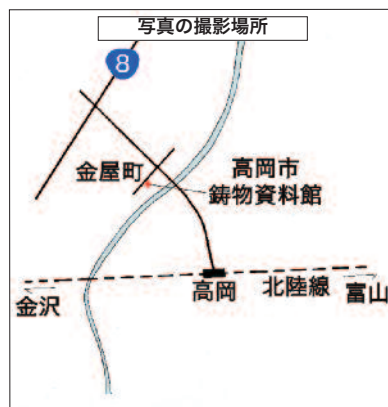
▲歌川広重「名所江戸百景」の内「四ッ谷内藤新宿」



甲州街道の最初の宿場であった内藤新宿は、現在の新宿御苑の北にある新宿通り辺りにあった。広重の浮世絵は、当時の人々から「うま(馬い)」と絶賛されたが、西洋の人々には価値観の違いから「馬の尻や糞は汚い」と酷評されたという。しかし、このような光景は当時の日常であり、馬の蹄には草鞋をはかせている等、面白い習慣が見て取れる。糞は肥として周辺農家が集めて回って、意外に街道は奇麗であったという。それにしても、大胆な構図の着想力に脱帽する。

対するは、富山県高岡市の「金屋高岡銅器の里」である。高岡銅器は日本における銅器の生産額の95%を占めると言う程有名になった。その発祥は、加賀藩主前田利長が現在の金屋町に鑄造師を集め、鑄物の生産を開始した事に始まる。金屋町の美しい石畳の中程に「高岡市鑄物資料館」があり、当時の鑄物の行程等を知る事ができる。

広重の構図があまりに大胆で、なかなかこれに匹敵する状況を発見する事は困難であった。偶然、金屋の美しい町並み保存地区に、銅像が飾られている事を知り、同じ構図の作品が撮れるのではないかと出かけた。店先にサッカー少年の初々しい銅像が飾られていた。この足元にカメラを置き、何かが起きるのをひたすら待つが、意外に人通りが少なく、その割に車が頻繁に停車して、この一枚を撮影するのに三時間を要する事になった。広重の作品がなかったら、絶対に撮れないアングルだろう。



■浮世絵の印象が北陸・高岡にある■

金屋●富山県高岡市金屋



▲金屋高岡銅器の里。古い町並みをそのまま残す金屋には、現代銅像が入口に設置され、銅器の里ならではの雰囲気がある。

浮世絵

写真

猿わか町よるの景 vs 金沢ひがし茶屋街



▲歌川広重「名所江戸百景」の内「猿わか町よるの景」



幕府は天保の改革、綱紀粛正の一環として、芝居小屋を浅草聖天町、現在の台東区浅草六丁目一帯へ移転を命じた。中村座系の元祖である猿若(中村)勘三郎に因んで、猿若町と名付けられた。浅草は当時江戸の町から随分遠隔地であり、当初は人が遠のいたが、その後人気を復活させたという。

作品は芝居茶屋の町並みを極端な遠近法で描いたもの。夜空を大きくとらえ、月影をくっきりと描くことによって、芝居町の独特の情景を表現する事に成功している。

時間的には暮れ六つ過ぎと思われる。季節は秋であろうか、猿若町はもう暗く、南の空に満月が出ていた。茶屋にはまだ明りが灯され、芝居を見終えた客達は提灯を下げた案内の男達に従って、帰路につく。屋台の親爺も店を終いにかかっている。そんな一時を切取った作品である。

対するは、石川県金沢市のひがし茶屋街である。この地は藩政時代から茶屋が多くあった所で、現在も保存地区に指定されて町並みが保存されている貴重な場所である。現在の町家は明治初期に建築されたものが多いと言う。撮影にあたって広角レンズを使用して、手前の柳を画面いっぱいに入入れ、町並みの奥行きを表現したもの。肉眼で見る構図とはかなり差がある。しかし、猿若町と、構図に近い。広重に広角レンズで見た感覚があったわけで、この点だけでも驚愕だ。

ひがし茶屋街は、金沢の観光スポットとして人気の高い場所で、外国人も多い。茶屋街に昔から登場する柳が、外国人の目にも珍しいらしく、盛んにシャッターを切っていた。

■浮世絵の風景が北陸・金沢にある■

ひがし茶屋街●石川県金沢市東山二丁目



▲金沢ひがし茶屋街。夕闇が迫る少し前、ぼんぼりに明りがともる頃、情緒は深まってくる。